

ひろば大代

NO. 195

大代公民館

戦時体験記



「鉄牌店の戦い」

平 武田 勇

私は、昭和十六年十二月五日、召集により浜田聯隊に入隊した。ところが入隊の日から三日後の十二月八日、日本海軍機のハワイ真珠湾攻撃により大東亜戦争が勃発し、米英との全面戦争に突入した。我々はこのニュースを聞き、これではとても当分の間、召集解除などあり得ないと、大いに落胆したものである。

爾来、初年兵時代を含め内地勤務一年半、中支派遣三年と計四年半の軍隊生活を送ることになった。其の間の出来事で、最も印象的で、私の脳裏に深

く刻まれたことといえば、やはりはじめての実戦の経験をした鉄牌店の戦闘であろう。以下この戦闘のあった忘れようとしても忘れることの出来ない昭和十八年八月十八日、今から約五十二年前の出来事を、一つ一つ思い出しながら、克明に記録してみたいと思う。

人間が死に直面するということは大変なことである。病気の場合もあろうし、事故災害の場合もあろうが、何れにしても、自分が其の場に至ることを誰も予測することはできない。私は囚らずも大陸の戦場に於てこの「死」を身近に感じたのである。身体のだこにも苦痛を感ずることなく、至極健康であるのに、これから数刻の後には間違いないく死への道を選ばなければならぬとしたら、人はどのような心境になるであろうか。私は大陸に渡って間もなくこのような場面に遭遇したのである。随分昔のことであるが、鉄牌店の戦闘のあった、あの日、一日の出来事はあたかも、映画のフィルムの一コマ一コマのように鮮烈に私の脳裏にやきついていてる。

当時、我々の部隊は中支蘇北に駐屯警備にあたっていた。中隊本部は揚州の周辺都市天長にあり、我が第一小隊はそこから十数キロ東南にある大儀集という地区を警備していた。内地をはなれてから一ヶ月余り、はじめて見る中国人や中国の風土・風物など、珍しいものばかりであった。土でできた支那の房子(家)の壁に、燃料にするために牛の糞を、まるで善石でも並べたようにベタベタはりつけ、乾かしている風景。至るところに掘られ、部落の中を縦横に走っているクリーク。道路のあちこちに見られる揚柳の並木など数えればきりが無い程である。

駐屯してまだ間もない頃であったが付近の住民との親交も生まれ、保長(村長)なども度々我々の兵舎を訪れては、情報を提供したりして、地区の治安を守ってくれる日本軍に対して、極めて好意的であった。

警備隊の兵舎は、部落の外れの広い田圃の中にボツンと一つあるお寺をあてたもので、周囲には鉄条網が張りめぐらされ、クリークも掘られてあり、また監視哨の立つ展望台も設けられ、

一応の防衛体制は整っていた。だが、なんといっても一ヶ小隊三十名余りの小兵力である。新四軍の大部隊に包囲攻撃されたり、また夜襲でも受けたら一たまりもないように思え、今考えると戦慄を禁じ得ない感じがするのである。

このような状況の中で、八月十八日突発したのが鉄牌店の戦闘である。実戦の経験のない我々は、まだ敵兵というものを知らない。射撃訓練の外は実弾など撃つたことがない。平穩な中国の風景の中で、おとなしい中国民と接していると、「ここは戦地なのだろうか。こんな平和な里のどこに戦いなどあるのだろうか。折角戦地に来たのだから、一度敵兵と一戦を交えてみたい」といったような、ぜいたくな疑問や願いさえも抱くようになっていた。

あの頃はよく晴天が続き、毎日うだるような暑さの中で警備にあたっていたが、この日も曇一つない快晴で、広い大陸一ぱいにキラキラした太陽の光が投げかけられていた。朝おきまりの点呼。兵舎内外の清掃。朝食が終わった頃、大隊命令があったとの事。内容

は「大儀集南方十二キロ地点にある鉄牌店という部落付近の道路偵察をすべし」といったようなもので、どうも大隊の討問作戦のため必要だったようである。

当時、日本軍が占領したといわれるのは都市と、それぞれの都市を結ぶいわゆる点と線に過ぎなかった。従って、広大な大陸の大部分の村落は、共産匪（新四軍）の勢力下であり、警備隊より五・六キロ離れたところは、もう敵地になるのである。

午前九時頃だったと思うが、僅かの残留者を残し、小隊の主力二十数名が兵舎前に整列し小隊長井田量好少尉より命令下達と訓示を受け、警備隊を後に、一路鉄牌店に向け出発した。小銃分隊二ヶ分隊、軽機、擲弾筒各一ヶ分隊の計四ヶ分隊であったと思う。分隊長四名の中に、私武田伍長も小銃分隊の分隊長として戦列に加わったのである。

百二十発の実弾の重みが、腰に食い込むのを感じながら、我々は焼けつくような暑い日射の中、延々と続く田舎道をただ黙々と行軍した。この付近に

は日本にあるような高い山はなく、高い丘陵と、その間にひらける広い田圃やクリーク、土塀に囲まれた民家のより集まった部落、などこの地域のどこにでも見られる風景が展開する。

正午前に目的地に着いた。鉄牌店はこのあたりの中心地とみえて、かなり大きな町の体を成していた。整備された街路の両側には、店らしい家も含め三十戸ばかりの民家が、ぎっしり立ち並んでいた。だが、人の気配はなく、どの家もまるで空き家のようにひっそりとしている。我々の行動がいちはやく住民に知れわたり、どこかへ姿を消してしまったようだ。新四軍の動向も察知、戦争による被害を恐れ、避難したものと思われる。現地付近の道路の状況を精しく偵察、調査し無事任務を終えた我々は、街をはなれた草原で昼食をとり、しばらく休憩した後帰途についた。同じ道を引き返したのであるが、出発して十分もたない頃だったと思う。

突然「パン、パン」と物のはじけるような音が、続けざまに激しく我々の耳にひびいてきた。「アッ、銃声だ！

「私は突作に思った。思いもかけない不意の敵襲に、皆一様に地に伏した。鉄牌店に入る我々の姿を見かけた新四軍が、掃りをねらって待ち伏せしていたに違いない。小隊長の命令で各分隊が匍匐しながら敵に向かって散開態勢をとった。このあたり、「内地でやっていた演習と同じだな」と私は心の中で思った。

銃声は益々はげしくなる。時々、「ヒューン、ヒューン」

という気味の悪い音が耳をかすめる。弾が近い騒擾だ。「声はすれども姿は見えず」で、一体どこから弾がとんでくるのか全然わからない。堆土の上から頭を出し、じっと目を凝らしてみると、やがてかなりの至近距離に敵兵が動くのが見え出した。二百米位だったろうか。或はもつと近かったかも知れない。青い民兵服を着た敵が堆土の間を右に左に移動している。行動が非常に敏捷だ。かなりの訓練を受けた兵隊のようだった。我々のもつ弾薬にも限りがある。一発の無駄弾も許されない我々は、少しでも敵の姿を見かけるとそれを狙い撃った。軽機関銃は故障で

充分威力が発揮出来なかったが、擲弾筒は爆発が大きい為、心理的にも大分効果があったように思った。

しばらく撃ち合いが続いたところで正面の敵に対し突撃命令が出た。敵の包囲網の一ヶ所を破らなければ、帰ることが出来ないからだろう。分隊を指揮する私は、これも内地の演習よろしく「突撃に進め！」とやったものだ。走っているとき、弾がとんできたのか

どうか、全然わからなかった。無我夢中だった。兵隊も勇敢に銃剣を擬しながら突進した。敵陣についてみると、敵兵は皆逃げ去っていたが、どこを撃たれたのか、負傷した敵兵が一人倒れ、「ウン、ウン」と呻いていた。その前に私の分隊ではなかったが、兵二名の戦死の報が伝わっていた。この負傷兵を友軍の一人が「戦友の仇」とばかり、銃剣で突き殺してしまった。戦争とは正に人と人との殺し合いであり、実に凄惨極まりないものであることを、私はつくづく痛感したのである。

一ヶ所の囲みは破っても、新手の敵が現れ、あちこちから我が方めがけて撃ってくる。あとで聞けば敵はゆうに

数百人はいたようだ。私が新たな敵の方向を見定めようと、なにげなく堆土の上に身を乗り出し、姿勢を高くしたそのとたんだった。突然「グワーン」と右足を固い棒でなぐられたような衝撃を受けた。「やられた！」と、とたんに思った。おそろおそろその部分を見てみると、ズボンの外がわに弾の通りぬけた二つの穴があいていた。しかし血が一滴も出ていないし、かすり傷一つないのだ。全く奇蹟に近い出来事である。そしてズボンの右のポケットに入れていた乗夾数個と小刀が原形がわからない程「グチャグチャ」に潰れていた。思えば戦場で乗夾を拾うなど、およそばかばかしいことだが、初年兵時代に身についた演習の習慣が、私を救ってくれたと思えば、なんとも有り難いことであった。

私の近くで小隊長の井田少尉も、私と同じように、かなり高い堆土に身を乗り出し、しきりに双眼鏡で敵の状況をうかがっておられたが、とたんに「ブスッ」という鈍い音がしたかと思うと「ガクッ」上体を前に折り、堆土に突伏された。もうそれきりだった。

特に苦悶の表情もない。完全な即死である。弾はこめかみから入り鉄帽を貫き外に出ていた。弾の出たところは傷口がざくろのように大きく開いていた。敵は遠くだと思つたのに、案外近くにいたため、思わぬところから狙撃されたのだ。井田少尉は遼寧郡井田村（現在は合併により遼寧郡温泉津町井田）の出身で大阪の方で銀行に勤めておられたとか、至つて口数の少ない温厚な方であった。軍隊の荒くれ男たちの中におられるのは、何か気の毒な感じさえした。しかし一旦戦闘が始まるや敵を恐れず自ら先頭に立ち、積極的に作戦の指揮にあたられたのである。しかも一瞬の油断がもとで、あのようにも命を失われたことは、実に惜しみても余りあることであつた。小隊長戦死により、我々も不安を覚え出した。小隊長の指揮は、田原軍曹がとることになつた。二、三名の兵と共に小隊長の足を持って、堆土から下の方へひきずりおとし、一応遺体の収容はしたけれども、このままではどうにもならない敵の射撃は益々頻繁になり、激しさの度を加えてきた。そこで下士官クラス

で話し合いの結果、多数の敵と正面から戦えば、どうしても我が方が不利になる。ここは一まず退却して、近くにある部落にたてこもろうということになつた。

小隊が一度に退却すれば、敵の一齐射撃を受け非常に危険であるので、分隊が交互に援護射撃をし合いながら退却をはじめた。小隊長の遺体を交代で背に負いながら走つた。普通歩けば三分か、五分かのところであろうが、実に長い時間をかけて、やっと部落に辿りついた。小隊長の遺体を民家の庭の奥まつたところにアンペラ（中国のむしろ）をしき、その上に置いた。早速死臭をかきつけ、あちこちから蟻がむらがつてくる。

私は、どす黒くかたまつた血が、べつとりとこめかみにくつついて、青白く交つた小隊長の死顔を眺めながらこの時なんともいえない死の恐怖感に襲われたのである。「たとえ民家にかくれていて抵抗しても弾薬にも限りがある。この小部隊では、そういつまで支えることは出来ないだろう。敵が、一度にどつと突撃を敢行すれば、我々

は防ぐ術もない。一卷の終わりであるああ！もう駄目だ。私の人生も、たった二十三年間の短いものだったのか」と、いくら死の覚悟をきめても、なんとかして生きのびられまいだろうかという、生への執着心があとから、あとから湧いてくるのである。銃声のあい間に、じつと目を閉じる。なつかしい故郷の山河、私の帰りを一日千秋の思いで待っているであろう母の顔。別れるとき、涙一つ見せず、平然として南方の戦地に向かつた兄の姿。親しくつきあつた知人、友人。また浜田聯隊での初年兵時代のつらかつたことなどがパノラマのように次々と浮かんで消えていく。なんとしても敵の侵入を防ぎ、最後の時間を少しでも伸ばすことを考えねばならない。

中国の部落は、大てい周囲が土塀でかまれている。我々はそこでしばらく、民家めがけて射ってくる敵に、土塀のかげから銃をかまえて応戦した。少しでも敵の姿が見えろとすぐ撃つた敵も事面倒と思つたのか、容易に近づいて来ない。そのうちに、今日の偵察に案内役として随行した楊通訳（中国

人)が「今こうして、ここに立てこもっている、敵は大部隊だから我々は遅かれ、早かれ、何時かはやられるにきまっている。自分がなんとか敵の目を逃げ、ここを脱出して警備隊に帰る通信で中隊本部に援軍の出勤を頼んでもらおうと思うがどうか。」というのである。彼のように日本軍の通訳をしているものは、新四軍から見れば敵に協力する憎い裏切者だから、見つかれば必ず殺されるだろう。それが恐ろしいので、ここを逃げ出すための口実にこんなことを言うのではないか。我々は、こうした疑いの心を抱きながら、互いに顔を見合わせたためらっていた。楊通訳は我々の心を察知したのか、ボンと胸をたたいて、「先生等は、おそらく自分が逃げ出すのではないかと疑っているのかも知れないが、自分は決してそんな人間ではない。自分も、一応日本軍に協力したからには、こうした時こそ、命をかけて働き、平素の思義に報いたい。是非自分を信じてくれ」と切々と訴えるのである。我々は彼の言葉が真実であるかどうか、半信半疑ながら、とにかく事態は一刻の猶予

も許されない。最後の望みを楊通訳に託し大儀集へ使いに出すことにした。そして彼が無事で任務を果してくれるよう祈るような気持ちで送り出した。だんだん時もち、銃声も次第に間が遠くなった。あたりも次第に夕闇につつまれ薄暗くなった頃、とうとう敵の銃声が全く途絶えてしまった。敵は包囲網を解いて引上げたのだろうか。或は我々を部落からおびき出す作戦なのだろうか。とにかく斤候兵を放ち、敵の有無を確かめてみることにした。数名の斤候兵が銃剣を擬し、恐る恐る前方をうかがいながら出て行った。しばらくして帰った斤候兵の報告によれば、この周囲のかなり広い範囲にわたり敵兵は全くないという。我々は何か信じられない気がしたが、とにかく戦死者の収容をしようということになった。民家の戸をはずして急造の担架により運び込まれた戦友の変り果てた姿に、皆一様に固唾を呑んだ。「紅顔空しく消えて……」という仏教のことば通り、血の気が失せて、青ざめた顔口から流れ出している血の気も、既に黒褐色に変じていた。出雲地区出身の

潮一等兵は、まだ独身だったようだが温泉津出身の大谷上等兵は妻帯者で、すでに数人の子供まであるという。鼻下に美ぜんを貯え、よいお父さんという感じであった。この二人の家族の方の御悲歎を考えたとき、なんともやりきれない思いがした。

日もとっぷり暮れ、大陸は静かに夜の帳に鎖されてきた。敵はおそらく、「まごまごしていて援軍でも到着したらたまらない。」と思つて引き上げただろうと思つた。後日談だが、楊通訳の話によれば、地区の住民が「日本軍を全滅させれば仕返しが怖いから、もう攻めるのはやめてくれ」と新四軍に哀願したという事実があったようだ。まだ多少の危険は感じられたが、いつまでもこうしていられないので、思い切つて帰途につくことにした。小隊長と二名の兵を失つた我々は、三つの担架をにない、真暗い夜の大陸の道を敗戦の口惜しさをかみしめながら、とぼとぼと進んだ。敵の襲撃に備え、特に周囲の状況に気を配り、警戒を厳にした。楊通訳からの連絡が届いたのか、途中で中隊本部から数十名の援軍が来

てくれた。戦死者が出たということ
皆驚いていた。そして口々に我々の労
をねぎらってくれた。「これだけの兵
力なら、もう大丈夫だ。」ここでやっ
と敵艦への不安が去り、緊張がほぐれ
た。全身の力が一時にぬけていくよう
に思えた。

警備隊に帰ってから、翌日、戦死者
三名の遺骨をとることになった。遺体
を焼く燃料にするため、住民が非常に
貴重なものにしている楊柳の木を沢山
切ってきた。そして遺体の腕を一本、
船で挽き切り、焼いたのである。遺体
全部を茶甕に附すだけの燃料がないか
らである。このことは、朝からはじめ
兵舎前のクリークの傍から立ち昇る煙
は一日中、大陸の空に流れていた。
片腕のない遺体は、兵舎の裏庭に三体
並べ埋葬した。小隊全員がまわりを取
り囲み、声もなく合掌し英霊の冥福を
祈った。

我々は大陸に渡ってから、はじめて
実戦を体験したわけだが、まさかあの
ような惨憺たる敗戦に終ろうとは夢に
も思わなかった。我々は翌春、昭和十
九年五月湖南湘桂作戦に参加するため

大儀集を後にしたが、いよいよ出発の
際には、兵舎の裏庭に眠る三名の英霊
に別れを告げ、後髪を引かれる思いで
なつかしい大儀集の地を免ったのであ
る。

―俳句―

あすなろ句会



万象を墨絵に染めて月高し
雨過ぎて余命を張りて蟬の声

下谷 尾崎三枝子

名月やつくばひに入る水の音

半月のかかる大屋根稲の秋

下市 渡 綾子

秋空を二分している飛行雲

このままに散らすは惜しきしだれ萩

椿 花田時子

石燈の羅漢に添ひて萩盛り

十六夜や昨日の供華の其のままに

柿田 横手いちえ

灰皿の煙の練々と秋の燈

連山のかすみて遠し蕎麦の花

椿 柿丸寿枝

あばれ蚊の迷いとびこむ墨池かな

かくれんぼそっと身を寄せ秋桜

八反田 森 信子

★――★おしらせ★――★

◎東京石見高山会総会参加者募集！

大代高山会

〔開催日時〕十一月十二日（日）

午前十一時半～午後二時まで

〔場所〕ホテルフロラシオン青山

（旧青山会館）

〔旅費〕自己負担

総会へのご出席を希望される方は早
めに各自治会長さん・大代公民館へ申
し込んで下さい。

*** **十月行事予定*** **

◆3日（火）編集委員会

◆8日（日）町民運動会

◆15日（日）大江高山草刈登山

◆15日（日）福祉弁当

◆17日（火）行政相談

◆21日（土）連合自治会

◆25日（水）健康相談

◆11月3日（日）大江高山登山

◎大代公民館より

先日寿会の皆さんに公民館周辺の草
刈奉仕をして頂き、大変きれいになり
ました。厚く御礼申し上げます。